The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	I. J. ピューラをめぐる記述課題の諸断面(1) : 敬虔主義の街、霊感的な詩作、崇高概念
Author(s)	福田, 覚
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2012, 12, p. 11-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77701
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

I. J.ピューラをめぐる記述課題の諸断面 (1)

—敬虔主義の街、霊感的な詩作、崇高概念—

福　田　　覚

本稿と次稿の前提となるこれに先立つ一連の研究では、ドイツ啓蒙主義のある時期までの詩学を、自然模倣説を基底とした言説体系と捉えて、その構造的特徴を描く作業を続けてきた。その作業のなかで、今はとりわけ、その情動論に関わる面を記述することが課題となっている。本稿と次稿では、初期啓蒙主義時代の詩人ピューラとその比較や延長上で視野に入ってくる人物たちを取り上げる。情動論的関心からピューラを取り上げる理由は、主に三つある。この時代の敬虔主義とのつながり、ロンギノス[1]の崇高論を訳し自らもその主題について書き残している事実、そしてゴットシェートに対する論争的な姿勢である。それらはそれぞれ、詩学上の立場やその情動論との関わり合いを考察するのに、見通しのよい標石になると考えられる。本稿では、ゴットシェートとの詳しい比較を行う前段として、ピューラについて記述していく際の幾つかの切り口について基礎的な整理を試みる。ゴットシェートとの対立については、稿を改めて検証し、それを情動論の視点から見た詩学史記述につなげていく予定でいる。

詩人であり文芸批評家とも言えるイマヌエル・ヤーコプ・ピューラは、1715 年 7 月 25 日、コトブスに生まれている。ベルリンで亡くなったのが 1744 年 7 月 14 日なので、29 歳になる直前である[2]。父親はプロイセンの地区法務官（Amtsadvocat）であったが、フリードリヒ＝ヴィルヘルム 1 世の財政改革で、増えすぎた法務官の削減が指示され、その地位が奪われてしまったため、家族は困窮することになったようである。ただし、彼は父親について何も言及していないので、父親自身のことははっきりとは分からない[3]。文学的関心という点では、ピューラはまだ若い頃に、ローエンシュタインやノイキルヒに傾倒したと伝えられている[4]。

ピューラと敬虔主義との関わりについて見ていくと先ず、学んでいたバウツェン（Bautzen[5]）のギムナジウムが敬虔主義の影響を色濃く受けていたことが分かる[6]。校長のベルナウアーがライプツィヒの地で学生生活を送り、その空気を吸った人物であった[7]。従って、そこで、その後の詩作の基本的な方向性が定められたと見ることもできる。敬虔主義は、教会の空虚で形式主義的な面とは距離をおき、むしろ日常の生活実践のなかに基盤を求めた、プロテスタントのなかの一種の信仰運動である。それには感情の宗教という側面があったと見てよいだろう。各人が敬虔な心的姿勢で内省してそれによって魂の内的な浄化を図るとされ、内省を重んじることから、空想にふけることになったり、ややもすると神学的な学問が軽視されたりした。敬虔主義が感情の宗教だとしたら、その影響を受けた詩作は、そしてその背後に想定される詩学は、情動論という観点から見てどのような特徴をもつのか。ここに我々がピューラに関心を向ける

理由の一つがある。

1　ピューラが身を置いたハレの人的環境

バウツェンのギムナジウムで学んだ後、1734年12月から1738年のおそらく年末まで、ピューラはハレ大学で学んでいる[8]。ハレは、シュペーナーに牧師職と教授職を斡旋されたアウグスト・ヘルマン・フランケ（1663-1727）がこの地に赴いて精力的に活動したことによって、敬虔主義の隆盛を見た街である。フランケは1695年に慈善学校（Armenschule）を設立し、貧しい学生をその教師に雇った。同年秋には、孤児学院がつくられ、牧師志望の貧しい学生を教師とした。98年にフランケは大学の神学教授となる。ハレの神学教育は知育よりも徳育を、理論よりも実践を重んじたものということで[9]、ここにも敬虔主義の特徴が浮き出ていると言えるだろう。プロイセン国王のフリードリヒ＝ヴィルヘルム１世は、1729年、ハレで少なくとも２年学ばないことには、プロイセン国内ではルター派の神学者にはなれない、という布告を出した[10]。こうして国家の保護の下にあったため、ハレには各地から多くの学生が集まったようである[11]。ピューラは、フランケの施設からの奨学金に依存しており、1736年から37年にかけて孤児学院で教師（Informator）として働いていた[12]。

大学生活を送りながらピューラがハレに居た間、この地には様々な人物がいた。ヴォルフが呼び戻される時点まではいなかったのだが、１歳年上のアレクサンダー・ゴットリープ・バウムガルテン（1714-62）が、フランケの学校[13]とハレ大学で学び、1737年からハレ大学で員外教授として哲学を講じ、1740年にフランクフルト・アン・デア・オーダーの教授となるまで在籍していた[14]。彼は、ハレ大学で神学、哲学、修辞学、詩学を学んだだけではなく、イエナでヴォルフの講義も聴講している。ピューラは個人的に接触があったようで、バウムガルテンの美学や形而上学の講義に出たことで、敬虔主義の旗色鮮明な神学部から叱責を受けている[15]。ピューラより３歳年下のゲオルク・フリードリヒ・マイアー（1718-1777）は、1727年にハレの孤児学校で学ぶようになったが、病弱な体質が理由で数ヶ月でやめている。その後、教会の上級執事の個人授業を受けたり、独学で学んだりしていたが、1732年からはハレ大学の講義を聴講するようにもなった。1735年に神学と哲学の学籍登録を行なっている。マイアーの好みの教員はバウムガルテン兄弟であったと言われる[16]。

ピューラ自身はハレ大学で、とりわけ、ヨアヒム・ランゲ（1670-1744）とジークムント・ヤーコプ・バウムガルテン（1706-57）の下で学んでいる[17]。ランゲは、ライプツィッヒで学究生活を送っていた時にフランケから決定的な影響を受け、フランケに付き従う形でハレへと移ってそこで学びを終えた人物で、ベルリンのギムナジウムで校長をして成功した後、1709年からハレ大学の教授となっていた。神学関係の著作を多数著す他に、教会詩も作った。ランゲは神学部の一員として、1723年のヴォルフ追放に関わっている。1740年にヴォルフがハレに呼び戻されて以降は、フリードリヒ２世によって、論争を続けることが禁じられた[18]。ピューラは、

そうした人物のところで、ヴォルフがいない期間に学んだことになる。因みに、このヨアヒム・ランゲの息子が詩人のザムエル・ゴットホルト・ランゲ（1711-81）で、ピューラが 1734 年に知りあってから亡くなるまでの 10 年間、親交を結んだ人物である[19]。

上述のアレクサンダー・ゴットリープ・バウムガルテンの兄であるジークムント・ヤーコプ・バウムガルテンも神学者で、彼もまたフランケの孤児学院で学んだ。その後も、1743 年（つまりヴォルフが呼び戻されて以降）に神学部の正教授となるまで、孤児学院とは緊密な関係が続いたようである。敬虔主義から出発しているが、特定の神学的立場に立つことは避けている。ヴォルフの哲学的な概念を神学に取り入れた点が特徴的で、ヴォルテールは、ドイツの学識者の頂点に立つ人物だと評していた[20]。

この２人以外にピューラが聴講した可能性がある人物として、ヨハン・ハインリヒ・シュルツェ（1687-1744）がいる。シュルツェもまた、フランケの孤児学院で学んでいる。その後、ハレ大学で神学、哲学、化学、医学を修めた。1720 年から 1732 年までアルトドルフの大学で教授職にあり、その後ハレ大学に戻って、亡くなる 1744 年まで大学に勤めた。シュルツェは非常に多彩な人物で、修辞学、古代学、医学の教授を勤めているが、1732 年から 1736 年まではハレ大学で古代学を代表する人物であったようである[21]。その時期にピューラはアエネイスについて学び、それに関する遺稿が残っているほか、1736 年にはアエネイスの翻訳もしている[22]。

こうして見る限り、ピューラは、ヴォルフが追放されていた間のハレで敬虔主義の空気を深く吸い込んでいたことは間違いなく、周囲にいたこうした人物群から彼らと共有したであろう思考の時代性が想像される。

2　敬虔主義との関連が問われる詩作スタイル

そうしたピューラの人的交流のなかで、特筆すべきがザムエル・ゴットホルト・ランゲとの関係である。ヨアヒム・ランゲの息子である彼は、小さな頃は父親から教育を受けたが、その後、マグデブルクの修道院の学校やハレの孤児学院に入った。大学では、神学の他に文献学、自然科学、医学の講義も聴講した[23]。1734 年の設立に彼が深く関わった会（Gesellschaft zur Beförderung der deutschen Sprache, Poesie und Beredsamkeit）に、ピューラも、おそらくハレ大学での学生生活を始めてすぐに参加している[24]。ランゲとピューラの交流は、詩的な創造を伴うものであった。1736 年にランゲはベルリンに向かうが、そこで父親とヴォルフとの論争に口を挟んですぐにまた去ることになり、ハレ近郊のラウプリンゲンで説教師となる。その機会にピューラが作ったのが、無韻の教訓詩（Lehrgedicht）、『真の詩作の神殿（Der Tempel der wahren Dichtkunst）』である。ピューラとランゲは、ゴットシェートに対して批判的な視線を共有していて、それがもとで、ピューラの早世後、二人の詩をボドマーが『ティルシスとダーモンの友情の歌』としてチューリッヒで出版することになる。

この『友情の歌』は、敬虔主義というプロテスタント神学のなかでの動きと詩作という文学

的な実践との関係を考える上で、特別な位置価をもつ著作として捉えられることがある。文学史上の感傷主義（Sentimentalismus）が敬虔主義の世俗的な派生形態なのかどうかをめぐって、ドームの 1995 年の論考はこの著作に注目した。かつては、敬虔主義と感傷主義はつながりのあるものと考えられていたわけだが、ザウダースが 1974 年の論文で、敬虔主義と感傷主義の関係を問うのはもう時代遅れであるとし、それを受ける形で、ヴェークマンも 1988 年に、感傷主義を世俗的な敬虔主義だとしてそこから導き出す試みに反対した[25]。ヴェークマンは、修辞学の伝統の役割を強調しながら、こう述べていた。

「宗教的な経験類型を仕上げていくということも、修辞学の伝統がなかったら成立しない。とりわけアウグスティヌスにまで遡る回心体験の伝統のラインは、すでにハンス・R・G・ギュンターが強調したように、より強く主体自身にむけて展開される表現形式を許すものだが、それをここで例として挙げることができる。というのも、この伝統の頂点が 18 世紀の敬虔主義だからであり、敬虔主義は、最終的には、神の確信をもっぱら内的な経験、直接的な感情生活に委ねる。しかしながら、内的な感情に対する、さらには、感情的な表現方法の拡大版リストに対するこうした体系的関心だけで、感傷主義を世俗化された敬虔主義として導き出すのに十分かと言うと、それは別の問題である。神学的な「起源」という場合にはなおさらだが、敬虔主義が先駆けであるという捉え方に対しては、一連の重要な議論の全体が――それを最初にもう一度明確に想起させたのはロルフ・グリミンガーである――直ちに反対の声を上げる。「敬虔主義テーゼ」が正しいものとなるのはむしろ、それを弱めた形、つまり、敬虔主義も感傷主義も第三項に、まさしく修辞学に関係付ける形においてである。包括的な存在としての修辞学から出発すれば（そしてそれは、修辞学のより大きな（国際的な）広がりをも証明するのではないだろうか）個々の一致や差異に対する問いが、無理に導き出さなくても、新たに立てられることだろう。」[26]

この流れの一翼を担ったグリミンガーの論考は、感傷主義がヨーロッパ規模の現象であるのに対し、敬虔主義はイギリスやフランスには見られなかった、という点を指摘していたのだが、それに対してドームは、1995 年に、その後の研究でドイツの敬虔主義はオランダやイギリスやフランスの宗教的な諸潮流と近い関係にあることが不十分ながら分かってきている、と指摘した[27]。グリミンガーは、感傷主義はスイス派の詩学によって、カルヴァン派のチューリッヒで準備されたもので、敬虔主義から導き出されるものではない、としていたが、ドームは、ボドマーが、ハレの敬虔主義から出てきたピューラとランゲの著作を公刊している点を挙げ、それによって説得力が弱まると述べた。ドームは感傷主義について、敬虔主義のみから単一的に生じたものではないにしても、敬虔主義との関係を単純に神話と片付けることはできないと言い、ゴットフリート・アルノルト（1666-1714）やクリスティアン・フリードリヒ・リヒター（1676-1711）の宗教的な詩作の先にあるのが、心の感性や聖なる感情を美的に扱う感傷主義で、

感傷主義の友情崇拝にそれが見て取れると考える。その端的な例がピューラとランゲの『友情の歌』である、というのがドームの見立てある。『友情の歌』は、無韻で、ホラティウスの頌詩（Ode）の形式を志向していて、それこそが、世俗化した敬虔主義の精神的高揚感を表現するのに最適の形式だという見方が提出されている[28]。

3　霊感的な詩人の像、友人との共感

感傷主義が敬虔主義を起源とし、それに由来するものかどうか、という問いに新たな見通しを付けることは、ここでは重要ではない。その関係が直接的でなくて間接的なものでも、あるいは、修辞学の伝統があって初めて成り立つ類縁関係だとしても、少なくともピューラにおいて敬虔主義の影響は否定できないことであるし、影響関係が認められなくても親和的な関係が認められるだけで、情動論という視点から神学と詩学の立論上の接点について考える我々の思索には十分である。

1988 年（第２版）のシュミットの研究を受けた形でドームが着目したのは、（以下はそれ自体ドームの捉え方に拠るものであるが、）古代からの霊感的詩人の系譜に友人のランゲを加えたこと、その系譜を宗教的な意味合いで再解釈したこと、それをゴットシェートが理想と考えていた合理主義的な詩人と対置したこと、である[29]。そこでは、霊感的詩人は、神学上の預言者に相当する存在となる。次の文章は、ピューラの『至高者の言葉』という頌詩の前書きのなかのものである。

「これに関して、日常的な頌詩からそのことばを判断しようとする者は、道に迷うであろう。ダビデや古い抒情詩人が手本であり、そこから歌を評価するべきだ。そもそも、アレゴリーが創作の基礎であるということを見なければならない。ある弁論家がよくない比喩で述べることを、詩人は観念のなかだけで変容させる。私が韻を踏まない語りで次のように書く時、私は間違ってはいない。ランゲ博士は神の助力に感謝しており、天使たちが神の誉れのなかで一緒に声を合わせ、敬虔な者たちを取り囲み、永遠の父の賛美をその作品とする。それ以外のものが私の創作のなかで想像されることはない。私が祝福のことばを神殿から響かせる時、これは第 18 詩篇の模倣である。そして、神殿を抜き出した部分がどこから取られたか、誰もが容易に気付くであろう。正直に言って、人の上に立つ精霊を人間の行動に混ぜ込んでしまうのは、奇抜なことではある。真実らしさ（Wahrscheinlichkeit）という点で、私達がどこまで踏み込んでいいのか、おそらく、キリスト教の詩人のなかではそれを確かめたものはまだいない。高尚なポエジーにおいて私達に規則を指示した者たちは、このことを書物や理性に従って定めることになった。ボワローは、彼の詩作の第３の歌で、これに真っ向から反対しているように思われる。しかし、比類なき批評家のボドマーは、『ドイツ詩の性格』のなかで、逆のことを主張している。」[30]

このように聖書の預言をモデルにして霊感的な詩作を正当化することは、ピューラの告解聴聞牧師でピューラときわめて近い関係にあったフライリングハウゼンがすでにハレの敬虔主義のなかで行っていたことである[31]。

ピューラの名を有名にしたゴットシェートとの論争の書でも、ミルトンを擁護するのに、ダビデを引き合いに出す箇所がある。

「だが私は以前、非常に恥知らずな告発を、もはや何も言えないと、無視したことがあった。しかしひょっとしたら、ここが最適の場所かも知れない。彼らは言う。ミルトンにあるのは軽蔑すべき妖怪物語だ、と。もう沢山だ。誰がたじろいで、そばにとどまると言うのか。皆さん、彼らはキリスト教徒だろうか。聖書が根拠になっている天使と悪魔の出来事が妖怪メルヘンなのか。誰がこんなことをキリスト教徒の筆に期待するのだろうか。G・・氏は、たいそう怒りながら、途方もない考えを口にした。あらゆる物事を明確にしたいと考えるお前たち、お前たちは、妖怪や天使や悪魔について、普通の人の区別ができるのか。あるいは、お前たちにとって、それらは一緒のものなのか。書いていることについて、別の折りにもっとよく考えてみてもらいたい。こんなに腹立たしい結論で我慢するべきでないのであれば。私はこんな結論を、キリスト教的な愛情から肯定することはしたくはない。だが、お前たちは無分別という批判を決して免れることはできないのか。お前たちは弁明するだろう。こうした考えを取るから妄想や迷信に扉を開くのだと。私はお前たちに、地獄や天国のこうした物事のすべてが感性的に表象されているからだという、もう一つの根拠を貸し与えよう。(というのも、お前たちは、自らは何も証明しないから。) でも、それらはそういうものではないので、従って、普通の人々は間違った概念をもってしまうのだ、と。だがお前たちは、それにもかかわらず、ますます深いところに落ち込んでいく。聖書はこうした表象で満ち溢れているではないか。ダビデやすべての預言者は、この点でミルトンに先行していたのではないか。彼らの表象は、信仰へと動かすのに、はるかに強大な重みを有していたのだ。」[32]

かなり激しい調子の文章で、この書の論争的な性格が伝わってくる。詩人を預言者に準え、詩作を啓示に準えることで、心や感情を直接的に詩にするスタイルが正当なものとして説明されるのが一般的だが、ここでは、詩のなかの形象についても、聖書に通じるような形で擁護されている。

預言者を範とした霊感的な詩作のスタイルは、感性面、情緒面の調子を合わせることによって成り立つため、「同化作用」という言葉で理解することが可能であると思われる。さらにまた、『友情の歌』の友情という主題、すなわち詩の素材についても、それが情緒面での「同化」を基盤としたものであることを確認できる。1984年に『友人としての市民』という著書を刊行したマイアー＝クレントラーは、そのなかで、18世紀半ばから、「真の友人」という時の条件に、

身分や宗教が同じということのほかに、気性（Gemüt)が同じということが加わったと述べていた[33]。ヴァニックは、ピューラに関する 1882 年の著作で、「18 世紀の感傷的な友情信仰は、敬虔主義に根ざしたものである」と考えていて[34]、「詩作上の熱狂と、友情の感情は、どちらも根は同じで、それは宗教的な緊密さである」[35]という言い方をしている。気性の面で、あるいは、宗教的な面で通じ合うのが友人関係だとしたら、そうした友情も同化的な作用と一体であると見てよいだろう。

4　ピューラの崇高論

このようにして、情動論的な関心をもって、個々の詩学のなかにある同化性や異化性といった考え方を見ていく場合に、取り上げなければならないのが崇高論である。グライムのところに残されていたピューラの手稿のなかに、ピューラによるロンギノスの翻訳やピューラ自身の手になる崇高論があり、1991 年にカルステン・ツェレの編集によって公表された。それがいつ書かれたものなのか、正確な時期は分かっていない。ヴァニックによれば、ハレにいる間にすでにロンギノスに取り組んでいて、おそらくそれはボアローの影響だということである[36]。ボワローによるフランス語訳は 1674 年に出版されている。ドイツ語訳が出版されるようになるのはさらに先で、ツェレは 1737 年から 1742 年の間に３つの翻訳が出されているとしている[37]。ヴァニックは、ピューラの崇高論については、ハレでの学究時代の後の「遍歴時代 1738-1742」という章で扱っているが、執筆時期を明確にすることはしていない[38]。ツェレはそれに対して、執筆がもう少し早かった可能性や遅かった可能性についても細かく検討している[39]。ピューラの崇高論には、元々タイトルはない。1991 年のツェレによる版に「崇高について（Über das Erhabene)」というタイトルが付いているのは、ツェレが付けたものである。その中に４つの短い章がある[40]。手直しの跡が見られる手稿で、ツェレの編集もそれを忠実に再現しようとしているが、文章自体はエッセイ風と言ってもよいような緩やかな調子の文章である。

第１章の冒頭は、人間は高いところ、崇高なものを目指すよう定められているが、欲望（Trieb）というのは毒されていて純粋なものではないので、真によりよいものを認識して、それに向かって努力できる人は少ない、といった言葉から始まる。従って、高みへと進む自らの道を探るだけではなく、道に迷う者を呼び戻すことも、理性的な人間の義務であるとされる。ピューラによれば、哲学者は、悟性を働かせて、真理の暗い深みへと突き進むが、ピューラは一般の人々に対しては、崇高なものを表象しつつ能力を鍛錬するように語りかける（ÜdE51)。

「欲求（Begierde）に対する表象能力の強い影響力はご存知であろう。その助けがなければ、思慮（Weißheit）そのものは、心の大部分において、徳のある行動へと動かす力を失ってしまう。」（ibid.）

ここでピューラは、何のために神が聖書を人間に与えたのか、と問う。聖書には幸も不幸も様々に描写されている。語りというのは、人の感情のなかに望ましい概念を形成するための手段である。人間はこうした能力を創造主の叡智に負っている。悟性のものである真理には一つのものしかないが、善や完全性は一つ以上の側面から捉えることができ、一つ以上の形で表すことができ、一つ以上の状況のなかで示すことができる。つまり、別の姿になりうる。我々は神という対象でさえ様々な仕方で、様々な関係に基づいて見ている。必ずしも崇高なものとして考え語ってはいない。弁論家や詩人にもこうした負い目があるに違いない。そこで模範が必要となり、指導者を買って出たのがロンギノスである、というのがピューラの議論である（ÜdE 51-52）。

このあと、ロンギノスに対する賞賛が書き続けられる。それにもかかわらずピューラが惜しむのは、ロンギノスのつくった建物が古くなってきている点、しかし他にそれに匹敵するものがない点である（ÜdE54）。ピューラは、聖書の高尚さ、崇高さを正しく認識しない誤った考え、誤った修辞学というものを疑問視する。単純さと高尚さが矛盾するという考えにひどく惑わされているというピューラの言葉には、ロンギノスの言う崇高は高尚な文体よりは簡潔な文体にふさわしいとしたポワローの問題提起の影響も窺われる（ÜdE54-55）。ピューラは、ロンギノスを初めて読んだ時、修辞学をほとんど覆い尽くしている無知の深い闇に突然強い光が差した、と述懐している。しかし、十分な明晰さに欠けるという声も耳にするようになり、「ドイツで最も偉大な芸術批評家であるボドマーとブライティンガー」が批判的な判断をしていることが自分にとって後押しになった、という[41]。そして、十分でない部分については、自らが図面を書いて新たに付随の建物を建てるという。それについて識者の判断を待つと述べ、とりわけボドマーとブライティンガーを評者に指名している（ÜdE55-56）。

長い序章とも言える第１章のあと、ピューラは第２章で語りや書き方についての考え方を示している。言葉や概念の秩序について語るこの部分も興味深いが、立ち入った議論は別の稿に譲る。そのあとの第３章がこの崇高論の最も重要な部分と見てよいであろう。第３章においてピューラは、古代の弁論家カイキリオス（Cecil）[42]が点けた火が消えてしまったあと、その後の試みですべての闇は取り除かれていないので、一層新たなランプに火を点けることが必要だと述べてから（ÜdE64）、悟性や意志の能力論に依拠した崇高概念の説明に取り組む。結局のところ、ピューラは、ロンギノスの足りない点を体系性と捉えており（ÜdE67）、それをヴォルフ哲学のような、悟性や意志の諸能力を規定する議論で補おうとしている。こうした議論は、ピューラがこの時代の人文科学の議論に目配りしていることを感じさせるものである。

崇高さは感じる（empfinden）もので、そのメルクマールをロンギノスは驚嘆や賛嘆であるとした。それらは、並外れた対象を見た場合には急に、それを感じたり表象したりした場合にはゆっくりと喚起される情動である。そうした崇高な対象とは別にピューラは、崇高な思考というものも考える。感じるというのは、目の前の対象によって感覚器官に起こる変化を意識することであるが、思考においては逆に、表象と概念を悟性の結合によって一つにしている。ピュ

ーラの説明によれば、表象は感覚のもとにとどまるが、概念は普遍的な類似や関係性へと向かう。表象では個々のものの像を目にするが、概念では普遍的なもの、あるいは、個々のものの種類を目にする。表象を足し合わせると現実的なものを思考することになるが、概念を繋ぎ合わせると可能的なものを思考することになる（ÜdE64）。[43]

ピューラは、精神的な能力を悟性と意志という２つの主たる能力に分けるのは周知のことだと言い、前者の系列に表象能力、想像力、記憶、判断力（理性）を、後者の系列に情念や情動[44]を入れている。表象能力は、表象やそこから分離される概念の母である。想像力は魔法使いで、死んだ表象や概念を再び目覚めさせる。記憶はそれらを真の子どもと見做す。理性はこれらすべてを一緒にして、思考をもたらす。諸概念に充足理由があれば真理となり、そうでなければ意見となる。表象も同じで、充足理由があれば真実らしい思考像となり、逆なら真実らしくない。さらには、快や不快の感性的表象を自身の状態についての表象と比較すると、情念（Leidenschaft）が生じる。欲求（Begierde）は、善悪の概念が自身の状態についての有用性や有害性の概念と統合する時に生じる（ÜdE65-66）。

可能性や現実性の表象を伴った様々な概念を認めたり、認めなかったりすることで、多様な思考ができる。思考の際にある物事に、通常の対象にはまったく見られない、あるいはそれほど見られない性質や特徴を認めると、それによって心は乱され、通常ではない変化が生じる。それが不思議さであり、驚嘆であり、驚愕である。それは、通常ではない欲求を抱いたり、通常ではない決断をする場合でもそうである。これに続けてピューラは、神々や英雄たちの行動、語り、決断を想像した場合でも驚嘆するし、自然や芸術の奇跡的な産物や驚愕の作用を想像した場合でも驚嘆し驚愕するだろうと言う。これが崇高であるとピューラは見る（ÜdE66-67）。

ピューラによれば、ロンギノスが言うそれ以上よい形で与えることが困難ないしは不可能なものというのは、字義通りに取ると広すぎて、崇高以外のものにも当てはまってしまう。ロンギノスはそれを驚きに値するものと結び付けていたので、それは分離できない。そうなると、語りが崇高になるのは、驚きに値するもので、それ以上よい形で与えることが困難ないしは不可能な場合である。結局のところ、崇高な語りや書き方による描写というのは、あらゆる概念とともに崇高な思考を表象させ、それによって読者に完全な思考と、それに付随してそこから流れ出る心の変化を生じさせる、そういう言葉の秩序である。ピューラは偉大、豪華、荘重などの例を挙げたあと、こう述べる。詩人の熱狂（Entzündung）、空想する者、想像、激しい熱情（Affekt）、狂乱、これらすべてが不思議さ、驚嘆、驚愕をもたらす。これらすべてが崇高と見做される。偉大なロンギノスはすぐれた手本を示したが、区別がなかったので多くの者が混乱した。解釈は素晴らしいのだが、説明と分類が十分明確ではなかったり、欠けていたりする。批評家としての並外れた趣味と鋭い精神はよかったが、体系性が十分ではなかったのかも知れない（ÜdE67）。[45]

ピューラの崇高論をかなり長くたどってきたが、基本的には、驚愕など異化的な情動の喚起を伴いつつ高尚な対象を表象させるというロンギノスの考え方を踏襲している。崇高論を再び

取り上げたポワローは新旧論争のなかで古代人を擁護しようとしていたわけだが、その後は、崇高論が想像力の飛翔を謳う詩論に取り入れられていくことで、近代的な詩学を前に進める役割を果たしたとも言われる。この点で言えば、ピューラの立ち位置は微妙である。キリスト教徒で、しかも敬虔主義の空気を深く吸っていたピューラが、異教徒で古代人のロンギノスを高く評価している[46]。しかし、先に見たように、ミルトンを批判するゴットシェートに対しては、聖書の描写を引き合いに出しながら、ミルトンを擁護していた。詩学史では、近代人ミルトンこそ、崇高の詩人として、再発見された崇高論によって評価されるようになった人物である。面白いことにピューラは、スイス派を「古代人の理解者であり擁護者」、ゴットシェートを「かなりのペロー主義者で、古代人に敵対する者」と見ている[47]。その一方で、ロンギノスの崇高論を修正しようとするピューラの道具立ては、悟性や意志の能力論であり、この時代の哲学を反映したものである。ゴットシェートを批判して、スイス派を最高の批評家と見るピューラであるが、ロンギノスの説明と分類が十分でないとする部分の考え方は十分に合理主義的である。しかし、そうした合理主義的な説明によって支えようとしている情動論的な核心のところでは、先に見たミルトン擁護の文章と合わせ考えると、ピューラは聖書やミルトンの詩を、通常とは異なるものという驚きをもって感じさせる異化効果を出発点に、受容者を崇高な対象へと情緒面で同化的に導くものとして理解していることが分かる。

5　さらなる記述課題の諸断面へ

紙数等の関係で本稿はここまでとして、さらなる検討は稿を改めて続けることとする。次稿では、研究史を踏まえながら、ゴットシェートとの対立関係を解きほぐしたい。さらには、スイス派の立論との比較、ズルツァー、マイアー、モーリッツに影響を与えた可能性にも目配りしたい。モーリッツは『アントン・ライザー』に描かれたように、敬虔主義の環境で少年時代を過ごした人物でもある。そこまでの論点を整理した上で、情動論の視点から見た詩学史記述へと議論を接続する。

ピューラという人は取り立てて大きな人物ではないが、宗教と詩作、神学と詩学の関係を考えさせ、ゴットシェートのライプツィヒに対するハレのポジションに関心を向けさせ、さらにそうしたことによって情念論の系譜において彼自身がどういう位置づけを得るのかを考えさせる。18 世紀の敬虔主義と合理主義という図式で考えた場合、個々の立場において宗教に求めるものの違いがそれを世俗したような詩学にそのまま違いとなって表れてくるのかどうか。聖書を引き合いに出す形でのミルトンの擁護や、詩人を預言者に準える議論を見たが、あるいはむしろ、詩人の創造を神の創造に準えるという自然模倣説の基本的な発想からすれば、後者はその一種のヴァリエーションに過ぎず、聖なるものの直観を重視する敬虔主義に近い詩学であればそうした時に預言という部分に着目する、というだけのことかも知れない。そうした点の考察が次の課題である。

表象能力の助けがないと思慮だけでは心は動かせなくなると言い、驚嘆という異化効果を出発点に対象へと同化的に導くことを考えているピューラの崇高論の議論は、真実らしさと不思議なものとの結合から詩作を捉えたブライティンガーの『批判的詩論』の立論に近いようにも思える。詩作を啓示に準えて捉え、心や感情を直接的に詩にする霊感的な詩作を擁護する点も、感情面の同化が基礎になっている。このことから、同化と異化を利用しつつ感情に訴え、情動を動かすタイプの詩学の存在が予想されるところである。それが宗教性を背景にしていることから、情動論の視点からは、情念の昇華を詩作の目的としていると捉えていいかどうか、そうした点も見極める必要がある。

ピューラは、ゴットシェートに対してミルトンを擁護し、逆にスイス派に信頼を寄せているので、ピューラの存在は、ややもすると、ゴットシェートとスイス派の論争を象徴的と見做す従来の定型的な文学史記述を裏付ける存在に見えてしまうかも知れない。しかし、人の行動だけを見ると対立しているように見える敬虔主義と啓蒙主義、スイス派とゴットシェート派も、思想的には融け合っているところがあっても不思議ではないし、共通の時代的基盤に立っていることは十分想定できることである。ピューラには折衷的に見えるところもあり、そうした点も稿を改めて検討したい。

---

[1] 誤ってロンギノスの作と伝えられたものであるが、この論文では便宜上ロンギノスと表記する。
[2] Carsten Zelle: „Pyra, Immanuel Jacob", in: Neue Deutsche Biographie 21. 2003, S.25
[3] Gustav Wanick: Immanuel Pyra und sein Einfluß auf die deutsche Literatur. 1882, S.6
[4] 学校時代にはノイキルヒのすべてを尊敬したという記述が残っている。Pyra: Fortsetzung des Erweises, dass die G*ttsch*dianische Sekte den Geschmack verderbe. 1744, S.107
[5] 都市名は Budissin という表記も見られる。
[6] Wanick S.11
[7] ibid, S.12
[8] Zelle, ibid.
[9] 伊藤利男『敬虔主義と自己証明の文学』、1994 年、25 頁以下。
[10] Wanick, S.13
[11] 1740 年にフリードリヒ２世が即位して、敬虔主義派が追放に関わったクリスティアン・ヴォルフがハレに呼び戻されたことで、ハレの敬虔主義を取り巻く環境は変化する。伊藤、49 頁参照。
[12] Zelle, ibid.
[13] 孤児学院だが、孤児以外の者も受け入れるようになっていた。Vgl. Josef Hanslmeier: „Baumgarten, Alexander Gottlieb", in: Neue Deutsche Biographie 1. 1953, S. 660
[14] バウムガルテンは両親を早くに亡くしている。
[15] Immanuel Jacob Pyra: Über das Erhabene. Mit einer Einleitung und Anhang mit Briefen Bodmers, Langes und Pyras, hrsg. v. Carsten Zelle. 1991, S.19 （以下、この文献からの引用は ÜdE という記号に頁数を添えて記す。）; Martin Fritz: Vom Erhabenen. Der Traktat >Peri Hypsous< und seine ästhetisch-religiöse Renaissance im 18. Jahrhundert. 2011, S.286
[16] Klaus-Werner Segreff: „Meier, Georg Friedrich", in: Neue Deutsche Biographie 16. 1990, S. 649
[17] Zelle, ibid.
[18] Jendris Alwast: „Lange, Joachim", in: Neue Deutsche Biographie 13. 1982, S. 549
[19] Vgl. Christoph Siegrist: „Lange, Samuel Gotthold", in: Neue Deutsche Biographie 13. 1982, S. 549
[20] Martin Schmidt: „Baumgarten, Sigmund Jakob", in: Neue Deutsche Biographie 1. 1953, S. 660 ; ヴォルテールの評価については以下も参照。Martin Schloemann: Siegmund Jacob Baumgarten. 1974, S.22
[21] Wanick, S.16 ; Hans-Dieter Zimmermann: „Schulze, Johann Heinrich", in: Neue Deutsche Biographie 23. 2007, S.

725-726

[22] Wanick, S.16

[23] Siegrist, ibid.

[24] Fritz, ibid.

[25] Burkhard Dohm: Pyra und Lange. Zum Verhältnis von Empfindsamkeit und Pietismus in ihren Freundschaftlichen Liedern, in: Theodor Verweyen (Hg.): Dichtungstheorien der deutschen Frühaufklärung. 1995, S.86

[26] Nikolaus Wegmann: Diskurse der Empfindsamkeit. Zur Geschichte eines Gefühls in der Literatur des 18. Jahrhunderts. 1988, S.33-34

[27] Dohm, ibid.

[28] Siegrist, ibid. ランゲは 1747 年に『ホラティウスの頌歌』を出版した。その前書き（Vorrede）はマイアーによるものである。1752 年にはホラティウスのすべての頌歌を翻訳して公刊したが、レッシングによって批判され、レッシングとの論争に発展した。

[29] Dohm, S.88

[30] I. J. Pyra: Das Wort des Höchsten, eine Ode. in: Freundschaftliche Lieder von I. J. Pyra und S. G. Lange. 1885, S.125-126

[31] Dohm, S.89

[32] I. J. Pyra: Erweiß, daß die G*ttsch*dianische Sekte den Geschmack verderbe. 1743, S.28-29

[33] Eckhardt Meyer-Krentler: Der Bürger als Freund. Ein sozialethisches Programm und seine Kritik in der neueren deutschen Erzählliteratur. 1984, S.32；ドームは、同じ著者が 1991 年に著した「18 世紀の友情」という論文を参照している。Vgl. E. Meyer-Krentler: Freundschaft im 18. Jahrhundert. Zur Einführung in die Forschungsdiskussion, in: Wolfram Mauser und Barbara Becker-Cantarino (Hg.): Fraunenfreundschaft – Männerfreundschaft. 1991, S.9

[34] Waniek, S.157

[35] Waniek, S.54

[36] Waniek, S.69

[37] ÜdE 11

[38] Waniek, S.69f.

[39] Zelle, S.76f.

[40] 順に、「高尚さの説明（Von der Erklärung des Hohen）」、「書き方一般について（Von der Schreibart überhaupt）」、「高尚さの説明（Erklärung des Hohen）」、「様々な芸術批評家の説明（Von den Erklärungen verschiedener Kunstrichter）」となっている。

[41] ピューラはロンギノスのもとを去り、自ら問題を追いかけ始めた。その折にも、一人の友人が自分と同じ考えで、いつも通り批判的な意見交換をしてくれた、と書いている。そこで最終的に、ピューラは、「ロンギノスのなかにロンギノスを再び見出した」という（ÜdE 55）。

[42] ロンギノスの崇高論はこの人物に対する反論として書かれていて、冒頭にその名が見られる。1738 年のカール・ハインリヒ・ハイネケンによるギリシア語＝ドイツ語の対訳では、Cecil という名前に対して詳しい脚注が付されている。Dionysius Longin vom Erhabenen Griechisch und Teutsch, Nebst dessen Leben, einer Nachricht von seinen Schrifften, und einer Untersuchung, was Longin durch das Erhabene verstehe, von Carl Heinrich Heineken. 1738, S.2-4

[43] ピューラはこのあと、思考の正誤についても見解を書き添えている（ÜdE65）。

[44] ここで暫定的に情念と訳した語は Leidenschaft、情動と訳した語は Gemüthsbewegung である。

[45] 最後の第 4 章では、他の芸術批評家による説明ということでラ・モットやダシエ夫人について言及される。

[46] Vgl. C. Zelle: „Logik der Phantasie"- Der Beitrag von Immanuel Jacob Pyra zur Dichtungstheorie der Frühaufklärung. in: Th. Verweyen (Hg.): Dichtungstheorien der deutschen Frühaufklärung. 1995, S.70

[47] I. J. Pyra: Erweiß, daß die G*ttsch*dianische Sekte den Geschmack verderbe. 1743, S.6; Vgl. Zelle, ibid.

本論文は、平成 22 年度－平成 25 年度文部科学省科学研究費補助金、基盤研究(C)「諸学の相関から見た啓蒙主義詩学史－「模倣の詩学」の情動面を中心に－」（課題番号 22520313）による研究成果の一部である。